



Title	家族支援実践における教育・学習の位置づけをめぐる一考察
Author(s)	丸山, 美貴子
Citation	社会教育研究, 38, 29-36
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80495
Type	bulletin (article)
File Information	003-0913-0373-38.pdf



[Instructions for use](#)

家族支援実践における教育・学習の位置づけをめぐる一考察

丸 山 美貴子*

目 次

1. はじめに	29
2. 家族支援論をめぐる	30
3. 家族危機の構造	30
(1) ABCX モデル	30
(2) 家族危機の存立構造	31
4. 協同的な家族支援システムが持つ可能性	32
5. おわりに	35

1. はじめに

1990年代後半以降、引きこもりや不登校、虐待など、家族をめぐる問題が社会問題となると同時に、その要因として家族機能の低下が指摘されてきた。2000代に入り、家族福祉、家族援助、家族支援の必要性が社会的、政策的に提起され、2010年前後から、家庭教育の政策化動向も盛んとなった¹⁾。

家族機能が低下しているのか否かの実証は、本小論の目的ではない。「ポスト企業福祉国家」段階に入った現代は、日本型企业社会が崩壊すると同時に、その社会を生きる人々の標準的なライフコースが崩壊し、「モデルなき時代」に突入したといえよう。個人や家族は、人生の諸局面において、状況定義と判断と選択を自己の責任で行い、対処戦略を選択していかなければならない。地域社会の急速な変貌（周辺化された地域では衰退であるが）と相まって、先の見えない時代に家族生活を営んでいくことは、大変な緊張とストレスを伴う。何かの変化をきっかけに、どの家族も危機に陥る可能性があるといえるのが現代ではないだろうか。

これまでの子育て支援研究は、「親育ち」「親のエンパワーメント」「親の学び」という観点から行われてきた。しかし、子育て支援は、実践が広がり深まるにつれ、家族支援と不可分のものであると認識され、また、そのような実践も展開されつつある。そこで、本報告では「家族支援論」に関わる選考研究を検討し、「家族支援」と「親の学び」の関連について考察することを課題としたい。

* 教育学研究院・助手

2. 家族支援論をめぐる

家族支援をめぐる領域には、家族福祉論、家族援助論、家族社会学、医療・心理的アプローチなどがある。家族福祉論は、子どもと家族の福祉制度や実践論に関わるものが多い。家族援助論は、保育士養成の専門科目に位置づけられた経緯もあり、家族をとりまく状況や政策の変化、保育士による援助の視点や原則を説くものが多くみられる。

それらの議論では、総じて家族や親は、支援される存在として前提されていることが多い。親子集団や保育園・幼稚園、地域とのつながりという社会的なコミュニティが、家族支援にもたらす意味も理念的に語られる傾向にある。

また、家族支援を考える際、例えば虐待や不登校などの問題ある家族を想定し、標準的家族から逸脱した問題家族とされ、危機に陥った家族をどう建て直すかという問題意識や文脈で語られることが多い。確かに、様々な支援政策はセーフティ・ネットの一つではあるのだが、一方で、それは家族という私的領域への国家・行政的介入政策でもある。先にふれた家庭教育政策の法制化の動きでは顕著だが、その意図は、国民統合のための家族介入戦略という性格を持ちうる。

このような問題状況を鑑みると、家族の危機に対する支援は矛盾を内包させていることがわかる。個々の支援者が善意で対処したとしても、支援者が意図しない統合や排除という意味が同時に含まれてしまうこともありうる。より大きな範疇では、健全な国民の育成、国民統合という政策の末端に位置する仕事にもなりかねない危険性をはらんでいる。

このような矛盾した状況で求められる家族支援をどのように考えたら良いのだろうか。仮説的に述べるならば、当事者たる家族成員が問題解決の主体となり、社会や国家や政策を相対化しつつ、新たな関連を創造していくような支援が求められるのではないだろうか。当事者家族のこのようなエンパワーメントを促す過程に即した家族支援のあり方を実践から明らかにしていく必要がある。そして、そのために家族成員、支援員、その他家族成員に関わる人々に求められる学びとはなにかが問われる。

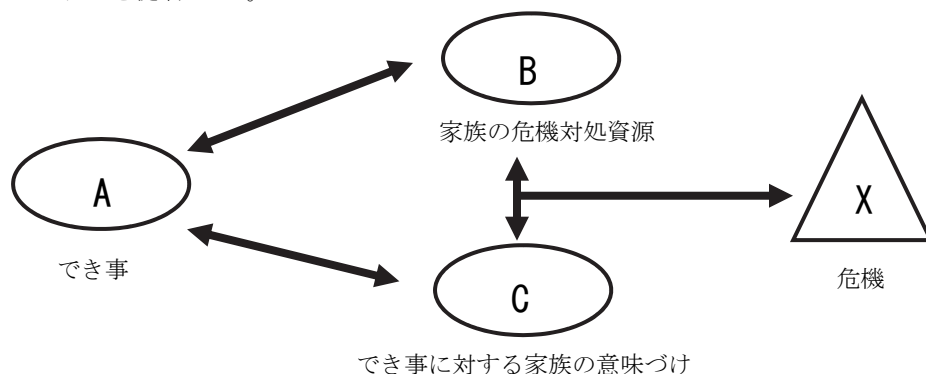
3. 家族危機の構造

家族危機の構造を考える際、家族成員の主体的行為を含む議論として、家族社会学の家族ストレス論がある。家族社会学における家族ストレス論では、家族危機の構造がヒルによって提唱されている。そのABCXモデルを検討したい。そして、家族ストレス論の枠組みにたちつつ、いかに家族システム（私的な側面）と外部体系（社会的側面）に関連性を考察することが可能であるか試みたい。

(1) ABCX モデル

まず、家族の危機の概念については、清水新二にしたがって「これまでとってきた対処戦略では、

対処しきれない家族ストレスに対して異なる対処戦略もとれず、対処法レパートリーの消耗ならびに対処能力の萎縮減退からくる対処指針の解体状況」としておくⁱⁱ。家族ストレス論において、あるストレスフルなでき事が家族危機として体験される仕組み、程度に関する概念モデルとして、ヒルはABCXモデルを提唱したⁱⁱⁱ。



このように、あるでき事 (A) が直ちに危機 (X) をもたらすのではなく、家族の有する危機対処資源 (B) と、でき事に対する家族の意味づけ (C) とが相互に規定し合いながら、ある時には何とか対処され、しかしある時には対処に失敗し、危機 (X) として発生するのである。このモデルは、家族支援の階層性が直ちに家族危機に帰結するのではなく、でき事を意味づける枠組みが対処の差異や危機として現象するか否かを規定するという論点を提示した。とりわけ、示唆的であるのは、C 要因としての問題の理解枠組み（「病気理解」 ex. アルコール依存症は病気なのだ）が家族危機を防止するうえで有効なことである^{iv}。すなわち状況認識を科学的に行う、またはセルフヘルプグループのように協同で状況認識を受け入れていくなど、基本的にC 要因を中心とするこれまでの心理教育的アプローチの妥当性が再確認されている^v。

(2) 家族危機の存立構造

上述のC 要因が心理的要因であるとすれば、このような家族の危機を理解する際には、社会的要因の観点の堅持が必要である。

家族は、常に何らかの支援システムを不可欠としており、存立しているのが実態である。そして、そのシステムのあり方によって、家族の形態も変化する^{vi}。家族の危機やその克服についても、こうした存立構造あるいはシステムとの関連で理解することが必要となる。

封建的な支配体制の下では、イエ制度は共同体（ムラ）と一体化しつつ機能していた。個別家族は共同体というシステムに支えられて成立し、家族は共同体に埋め込まれていた。この場合、生活の単位としての家族の意味づけの枠組みは共同体としての社会的なルールと連続的であり、資源の利用についても共同体の調整に規定されていたといえるだろう。

現代における家族の個別化の進展は、一見すると封建的共同体システムのくびきから解放されたように思える。変わって、個別家族生活に浸透したのは市場によるサービス・財の購入による家族機能の維持であり、家族を支えるシステムが市場システムにとってかわったのが現代的な特徴であるといえるだろう。それに伴いB要因とC要因の関連にも変化が生ずる。

消費は個別性を特徴とする、家族の生産機能が外部化し消費の場になることは、家族が個別化し、他家族との境界が明瞭になることを意味する。さらに、サービス・財の購入によって必要を満たさざるを得ないというシステムの特性から、現代における家族の資源格差が拡大する(B)。

また、意味づけの枠組み(C)も変化する。高度経済成長期の大量生産・大量消費の市場システムは、標準的な生活様式を現象的には階層横断的に成立させた。そのため、政界、財界、または商品生産者側の戦略の影響を受けた「人並み」「世間なみ」への生活平準化の規範の影響を強く受けるようになった。同時に、ポスト・フォーディズムの下での競争的秩序の受容が、個々の家族の「自己責任」意識を強化し、同時に個別化した家族は、家族内外の一般互酬性(「お互い様」の関わり方)の規範を低下させたと言えるだろう。

このような観点に基づけば、家族支援の基本的課題は家族の自立化(=活動の自由度を拡大すること)に向けた支援システムの現代的な再構築を必要とするのではないだろうか。それは、同様の経験をもつ当事者どうしや支援に関わる専門機関が、協同で関係をつくりかえ創造する実践を含む協同的な家族支援システムと考えられるものではないだろうか。そして、それは家族成員の意識変化としての学びのプロセスをうちに含むものでなければならない。

4. 協同的な家族支援システムが持つ可能性

次に、保育園での子育て・子育て支援を対象に、協同的な家族支援システムの一事例を検討したい。

子育ての過程で生じる問題も、家族危機をもたらす「Aでき事」となり得る事柄である。保育園に子どもを預けている家族は、家族構成、年齢や親自身の生育歴、職業、生活体験、家族生活など、かなりの多様性を持つ保護者が集まっている。当然、それぞれの家族によって「B危機対処資源」「Cでき事への意味づけ」は異なるであろう。つまり、保育園は、日常的には出会いがたい家族どうしが、子どもを真ん中において出会わざるをえない場である。

A保育園 B保育園：年長組

(7家庭：うちひとり親家庭1／男児4名、女児3名：うち知的発達障害児1名)

(1) 4月第1回年長児クラス懇談会：保育参観を30分程度行い、子ども集団の様子を観察後、親だけで懇談(3時間)

(保育参観の様子から)

* (ホールの後片付けをめぐる：バケツをおいていた場所がビショビショに濡れていたが、誰も片付けず放置されたままであった。保育士が E に「どうするの?」と聞くと「濡れているから拭いた方がいい」と言って、数人が行動に移した。⇒「どうするの?」という言葉を待っている。指示や働きかけがないと動けない。

* 参観の最後の場面で、C と D のケンカの場面がみられた。親は成り行きを見守り、途中から保育士が双方の主張を整理し、話し合いは終える。問題は、大声でのケンカが始まっても、他の子どもが我関せずという態度で関心を持っていない。⇒集団がバラバラであること、子どもどうしの関わりが薄いことが伺える。

* 年中のクラスの時「年中さん、聞いているの!!」何回も大きな声を出して初めて通じる。自分のことと思って聞いていない。⇒言っても、子どもの心に入っていない状態。

* 年長の4月の課題の雑巾縫い。今年は、雑巾縫いが完成してもみんなに見せたいという動きが見られなかった。E は、雑巾が縫えた日に家でその出来事を話さなかった。家に帰るまで残っていない⇒感動が薄い、気持ちや感情が残っていない。

* 全体として：身体はよく育っているが、心が育っていない。

年長組にあがっての第1回の懇談会で、子ども達の様子を目の当たりにし、同時に保育士から普段の生活の様子を聞くにつれて、全体としては、子どもの育ちが危機的なことが共有された懇談会であった。

どのようなことが課題であるのか(クラスで共通する課題もあれば、個々の子どもの課題もある)、なぜそれが課題なのか、それはどこから来るのか。子どもの様子から課題を読みとること自体が難しい。各保護者が子どもの様子を見てどのように感じたのかをまず出し合っていく。そして、「これで良いのだろうか」「何か働きかけをしないといけないのでは」という認識を共通のものにする努力がなされる。そのうえで、各家庭での親の子どもへの接し方、声のかけ方、どのような会話をしているか(してきたか)、子どもの興味を示したことや取り組んだことに共感をしているか(してきたか)、などを題材に、各保護者が振り返り語っていった。

(2) 5月第2回年長児クラス懇談会

E と数人の男の子がひとりの女の子をいじめていることが発覚。なぜ、このような行動が現れるのか、家庭で子どもと話し合ったことを各々の家庭から出し合う。E の家族では、父と母の話し合いが深まらず、原因もわからない、親としてどのように関わったら良いのか暗闇の中、離婚も考えたとの話も出る。

(3) 年長児の変化のきっかけ

この年は雨が多く、夏まで、園舎内で鬼ごっこやリレーをして過ごすことが多かった。しかし、グループ分けなど仕切るのはいつも年中クラスのリーダー。年中のリーダーにおとなしく世話をされる年長児で良いのか。保育士と親たちは考え、椅子取りゲームを取り入れた。このゲームだけは、最後まで年長児だけしか優勝できず、年長児の自信の一つにつながっていった。

また、7月には天の川づくり、8月には縄編み、9月には運動界、10-11月にはちょうちんづくり等の難しい課題にとりくみ、年長の子ども達は変化していく。とりわけ、障がいをもつFが縄を編み、運動界に向けて、全く飛べない状態から縄を片手で回る→両手で回してまたぐ→一回飛べる→5回飛べるようになる→大好きなお姉ちゃんが11歳だから11回頑張って飛ぶ→そして、運動界当日には15回飛ぶことができた。毎日毎日、Fの意欲と頑張り、「できなかったことが頑張ればできるようになる」その姿に感応し刺激をうけて、他の年長児も力を出す、頑張りや努力を応援する、出来るようになったことを自分事のように喜ぶという関係が生まれてきた。

(4) ちょうちんまつり後に寄せられた母親からの手記

「(ちょうちん) 祭りが終わって5日後ですが、Eに変化が！手先を使った作業が苦手で、イエでもあまり「縫いたい！」とはならなかったのに、ほつれた巾着の修復をやりたいと言ってきました。しかもすごく綺麗に縫い上げ「もっと縫いたい！」と。次の日にはミニ巾着を作り始めました。そして毛糸で三つ編みをやり始めました。今まで苦手で避けてきた事を自分からやりだしたんです！ちょうちん作りで手先を多く使い、少しずつ自由が効くようになり、それが自信になって、やりたいという意欲に繋がったんだと思います。

以前、保育士との話の中で、

保育士「手先には折り紙がいいよー」

私「でも、全然やらないんだよね。あんまり好きじゃないんだわ」

保育士「それは楽しめてないんだわ。楽しくなるまでやれてないんだ」

その時の私は、好きじゃないのに楽しむってどーゆーこと？好きじゃないんだから楽しめないよな。Eは折り紙に興味薄いんだよきっと。と、保育士の言うことが理解できませんでした。でも、年長の課題を通してこの意味がリアルにわかりました。手先が上手く使えないから手先を使うことが好きになれないだけで、それを獲得すればどんどん意欲的にやり始めるんだ。勝手な親の思いで「好きじゃないんだわ」のひと言で片付けようとした自分にハッとさせられました。」

このように、個々の家族の多様な資源や価値観が階層横断的に共有されることにより、困難な状況

に陥った家族は問題解決の選択肢を拡張し、その事態に関する物語を書き換えることも可能になるであろう。このような家族間協働の支援システムも一つの可能性である。

5. おわりに

以上のような協同的な家族支援システムが有する意義を確認しておきたい。

第一に、これらの協同的な家族支援システムの形成は、「でき事」（＝子どもの育ちの課題）への対処を家族まかせにせず、協同的課題としてとりくむことを可能としている。また、保育士が関わっていることで、子ども理解も含めて専門的な知見にもとづく対処が可能となっている。家族の側からすると、先のモデルのB要因、つまり家族資源が増大する可能性を得たと言えるだろう。

第二に、支援システムとその周辺での対話と活動によって、家族内のC要因は開放的で動的なものに変化する可能性を得る。この保育園では、親による劇やまつり、運動会準備など、保育を支えるために協働して活動を行う。このように支援システムが親集団や親自身の文化活動といった協同的活動を組み込んでいるため、協働に内在するルールや文化の発展・変容もみられ、それが個別家族のC要因に作用を及ぼす可能性を有する。C要因は意味づけとして、文化や規範に関わる概念であり、この点に関わっての親どうしの学びがすすんでいくと考えられる。

以上の意義を確認しつつも、実践の過程における学びの構造やプロセスについては十分な実証ができたとは言いがたい。子ども理解、子どもの発達理解、親子関係理解、夫婦関係理解、地域社会への理解など、どのような学びの質が肝要であるのか、より精緻な実証分析が課題である。

-
- i 木村涼子 (2007) 『家族支援は誰のもの？家庭教育法はなぜ問題か』岩波ブックレット
 - ii 清水新二 (1992) 『アルコール依存症と家族』培風館、p6
 - iii 清水新二、前掲書、pp46-47
 - iv 宮崎隆志「家族の危機と協同的支援ネットワークの課題」『子ども発達臨床研究』第2号、2008年
 - v 清水新二、前掲書、p132
 - vi 宮本誠貴「家族を問い直す」『学童保育研究』No.4、2003年

<参考文献>

- 浅田（梶原）彩子「ひきこもりを抱える家族の実態とその支援」奈良女子大学家政学会『家政学研究』Vol. 55, No1, 2008年
- 浅田（梶原）彩子「ひきこもり家族会と家族の認知変容」『奈良女子大学社会学論集』Vol. 17, pp189-207, 2010年
- 石原邦雄『改訂版 家族のストレスとサポート』日本放送出版協会、2008年
- 荻野達史他編著『「ひきこもり」への社会的アプローチ』ミネルヴァ書房、2008年
- 清水新二『アルコール依存症と家族』培風館、1992年
- 清水新二「家族問題・家族病理研究の回顧と展望」『家族社会学研究』No10, pp31-83, 1998年
- 清水新二編『家族問題—危機と存続』ミネルヴァ書房、2000年
- 清水新二『共依存とアディクション』培風館、2001年
- 辻智子「『家庭教育』の意味すること」松本伊知朗他編『生まれ、育つ基盤—子どもの貧困と家族・社会』明石

- 書店、2019年、pp237-254
- 畠中宗一『子ども家族支援の社会学』世界思想社、2000年
- 畠中宗一『家族支援論—なぜ家族は支援を必要とするのか』世界思想社、2003年
- 林浩康『子どもと福祉 子ども・家族支援論』福村出版、2013年
- 野々山久也編『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社、2009年
- 野々山久也、清水浩昭編著『家族社会学の分析視角—社会的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房、2001年
- 宮本みち子、清水新二『家族生活研究—家族の景色とその見方』日本放送出版協会、2009年
- 山田勝美、鈴木力編著『子ども家族援助論』川島書店、2003年